

とうほうだい 授業だより (国語より)

12月2日(木)の3時間目、授業観察で教室を回っていると、2年の1クラスが国語の授業をしていました。単元(教材)は、よく知られている『お手紙』。かえるくんとがまくんの友情を描いた物語で、みなさんの中にも学んだ覚えのある方がたくさんいらっしゃると思います。授業では、児童たちが、先生の発問をしっかりと聴き、ワークシートに自分の考えを書き込んだりしながら、かえるくんやがまくんの心情を読みとっていました。物語に興味・関心をいだきながら、そして、楽しみながら、児童たちは、ストーリーに入り込むことができていたように感じました。

さて、全校に視点を広げると、この12月は、各学年で国語の時間の読みものの教材として、1年生は、『おとうとねずみち口』。2年生は、『お手紙』。3年生は、『モチモチの木』。4年生は、『ごんごつね』。5年生は、『大造じいさんとがん』。6年生は、『ヒロシマのうた』に取り組んでいます。これらの読みものの教材の題名をご覧になり、記憶に残っている教材がいくつかある方もおられるのではないのでしょうか。中には、半世紀にわたり、国語の教科書に取りあげられているものもあります。私自身も、あの日あの時の授業での、児童とのやり取りが思い出され、懐かしく思われるものもあります。

話は変わりますが、たくさんの国語力に関する著書を出され、コメンテータとしても活躍されている、明治大学文学部教授の 齊藤 孝 氏 曰く、『国語力(読解力)を向上させていく上で最も効果的な学習は、名文に親しむこと』と明言されておられます。また、「名文に宿る先人たちの尊い精神をしっかりと取り込み、自分の命としていく上で有効な手段が音読です。」と言っておられます。読みものの教材(名作)を通して、人生観を児童に伝えることは、教師としての、教師にしかできない尊い仕事だと思えます。「名作、名文は、暗唱できるぐらいまで、児童に読み込ませなさい。」と今は亡き、先輩の先生に指導していただいたことばは、今もなお、身に染みて、心に残っています。

